

# 雨引山樂法寺所蔵《善女竜王像》について

渡邊 晃

はじめに

本稿は雨引山樂法寺所蔵の善女竜王像（以下、樂法寺本）（種図1）に関する調査報告書である。調査資料の現状について報告するとともに、その図樣的特徴について述べる。また、他の類例との比較により、本図の図樣的位位置付けについても若干の考察を加えるものである。

## 一 調査資料の現状

作品名 《善女竜王像》

作者 不明

制作年代 江戸時代

所有者 宗教法人 雨引山樂法寺

材質技法 軸装 紙本着色

数量 一幅

法量 縦一六六・八cm 横五五・二cm

本図には裏書があり、以下のように記載されている（種図19）。

善女竜王 高祖大師御眞筆寫 顯幢淨寶  
在干 和州 宝生山 寶庫 聖元

本図は紙本着色で描かれる。細部に剥落、虫喰いなど見られるものの、海波に用いられる青や衣服に施される朱や金泥など、全体として顔料の保存状態はよく、鮮やかな画面を保持している。画面中央には涌雲に乗った善女竜王が描かれ、手には宝珠を乗せた華盤を持ち、頭には宝冠を戴いている。また衣服の裾から竜の尾が伸びる。衣服の文様、涌雲など、細部まで丁寧な筆致で描かれており、波濤の描写には、絵具を吹き付けたような技法が認められる。また、海波、涌雲には、胡粉による、暈しを伴った彩色が用いられる。宝冠、華盤、衣服、沓など数箇所に金泥が施され、よく遺存している。

表具の状況について述べる。まず「天」部分の中央部に、細かな虫喰いが水平方向に向かつて帯状に伸びているのが認められる。また間隔をおいて下部には、同様の虫喰いが水平方向に見られた。表具の「天」と、「中廻し」の間の境界においては、表装の紙が剥がれ、上下にめくれている。

画面左手の「柱」には、上方から下方にかけて、等間隔をおいて虫喰いが見られる。また、左側の「柱」と「中廻し」との間には、かなり細かい間隔で垂直方向に伸びる虫喰いが、上方では「天」、下方では「地」部分との境界まで続く。同様の虫喰いは、画面中央より少し左にも見られ、これは「中廻し」から本紙の中央に及ぶ。左側の「柱」は、虫喰いの原因とするものか、画面中央において外側が若干破れている。同様の傷みは、左側の「柱」の画面中央より少し下にかけて、数箇所に確認された。右側の「柱」につい

ても、画面中央より少し上方に、左側より軽度ではあるが、破れが見られた。また、左右の「柱」の、中央よりやや上部には、紙継ぎが認められる。画面下部の「地」部分には、中央に、上から下に伸びる染みが見られる。

全体的に巻皺が見られるが、それに起因するものか、本紙の尊像部分に、水平方向へと伸びる皺や、亀裂が認められた。善女竜王の相貌の付近には、額、目、鼻、口の下部、顎の高さに、水平に延びる皺が見られ、その周囲の顔料が若干剥落している。また、相貌の右側、目の辺りから顎にかけて、縦方向に細かな亀裂が走る。

画面中央左の、善女竜王の右手部分には、水平方向に亀裂が入り、周囲の顔料が剥落している。また画面中央右、左肩から胸にかけて、やはり水平に伸びる皺が認められた。画面中央やや下、膝の辺りには、画面左端から横方向に向かつて、少し右上がりに、数本の皺が伸びている。画面下部、衣服の左側に見られる、裳裾に胡粉が彩色された部分には剥落が見られた。

画面裏から光を当てて見てみると、縦横に伸びる紙継ぎが多数認められる(補図20)。これらの紙継ぎは、表および裏面に直接施されたものではないことが見て取れ、肌裏に施されたものであることがわかる。肌裏は当初から比較的小さな紙を継ぎ合わせ、用いられたものであり、また鏝は認められないことから、本図はまだ一度も修復を経っていないことが窺える。

## 二 画題と本図の図様の特徴について

善女竜王という画題については、空海が天長元年(八二四)に神仙苑において請雨の修法を行った際、愛宕山に現れたという伝承で知られ、『御遺告』(一)などに善女竜王に関する記述が見られる。

善女竜王像は、真言系密教寺院を中心として幾つかの作例が見られ、もともとも遡る例として、金剛峯寺本(補図21)(国宝)がある。金剛峯寺本は久安元年(一一四五)の制作とされ、定智真筆として知られる(2)。また、醍醐寺には二点の白描図像が伝わり(補図3、

補図4)、そのうち一点には建仁元年(一一〇一)に定智本を模写したことを伝える裏書がある(3)。また大通寺には、鎌倉期のもたとされる善女竜王像が伝わる(補図5)(4)。真言宗豊山派総本山である長谷寺にも、江戸期と推定される二点の善女竜王像が確認される(補図7)(5)。

また、室生寺には、制作年代を一四世紀とする善女竜王像が所蔵されている(補図6)。本図の裏書には「在干 和州 室生山 寶庫」という楽法寺本がもとと室生寺にあったものとする記述がある。また「高祖大師御真筆寫 照幢淨寶」とあり、照幢淨寶という人物が、高祖大師真筆の善女竜王像を写したものと読める。この照幢淨寶は、同じく兩引山所蔵の「阿遮羅尊像」の裏書によれば、「熊野山宝輪院第廿九代」であるとされ、文化元年にこの阿遮羅尊像を修復した人物とされる(6)。これらの記述の内容をまとめると、兩引山所蔵の善女竜王像は、照幢淨寶という人物が江戸後期に高祖大師真筆の善女竜王像を写し、室生山宝庫にあったものであり、いつからか楽法寺に移ってきたものであるということが窺える。

室生寺の地には古くからこの地で信仰されている竜穴をまつた室生竜穴神社があり、竜王や祈雨の聖地とされてきたことが知られる。また、『日本名刹大事典』の室生寺の項で平岡定海氏は以下のように記述している。「竜穴の信仰については、天長元年(八二四)の早魃に際し、空海が勅命を受けて、「請雨秘法」を行ったとき竜王が感応して、甘雨が降ったので、空海はこの時、さきに京都の神泉苑でまつた摩尼宝珠を、この地に納めることとした。その後、天下が早魃のときには、この竜穴に祈りを捧げると雨が降ると考えられるようになって、朝廷より請雨の祈りが捧げられることがしばしばあった。その際には大雲請雨経・大雨輪請雨経・陀羅尼集経請雨品などが盛んに誦まれた。また当寺は竜穴神社の神宮寺とも称されて、貞観九年(八六七)には竜穴神に正五位下位が授けられ、女竜王とし、寺号を竜王寺と称された」(7)。

この記述にも見られるように、室生寺は善女竜王にゆかりの深い寺院であることがわかる。

室生寺所蔵の善女竜王図について中島博氏は、金剛峯寺本との比較の中で、「本図の像

容も基本的にはそれと共通し、唐装で宝冠を着け、宝珠を載せた皿を持ち、衣の裾には龍の尾がのぞいて見える。涌雲に乗るのも定智本と同様であるが、像の周囲全体に海波を描くのはそれと異なる。醍醐寺の密教図像の中には定智本の写しとともに、乗雲の下部に水波を描いた図もあり、本図の構成はその延長に置いて考えられよう」と解説し、本図が像の周囲に海波を描くその様式を金剛峯寺本などとは異なる独特なものとし、それが醍醐寺本の延長にあるものとしている<sup>8)</sup>。

樂法寺本を室生寺本と比較してみると、まず、尊像の周囲に海波を巡らすという点で両者は共通している。このような表現は、中島博士の指摘した醍醐寺本のうち一点にみられるが、醍醐寺本のもう一点や、金剛峯寺本、大通寺本にはみられない。江戸期の作例として紹介した、長谷寺本のうち一点(種図7)には、この特徴を見出すことができる。室生寺本は画面状況が悪く、細部は明らかではないが、海波の形状もよく似る。また画面上端まで波で埋め尽くされるのではなく、水平線が設けられ、上端との間に余白があるという点でも、両者は共通する。長谷寺本のうち、海波の描かれた一点は、室生寺本、樂法寺本の余白にあたる空間に、山が書きこまれている。また、湧雲の表現は、金剛峯寺本、大通寺本、醍醐寺本、室生寺本ともにそれぞれ異なった図様を有しているが、室生寺本と樂法寺本は、細部の描写については異なるものの、全体的な形状などは類似することが窺える。

尊像に目を向けると、まず衣摺線において、樂法寺本と室生寺本は類似しており、衣服の文様にも多くの共通点が見られる。袖や、袖の縁の部分を見てみると、点在了た文様の位置、形状において両者はかなり似通う(種図9、図10)。本稿で取り上げた他の作例に、この文様は見出せない。図示したのは画面右側の袖であるが、左側も同様である。また樂法寺本には善女竜王の胸のあたりに、海獣のようなものが描かれているが、若干向きが違ふものと同じ図様が室生寺本にも描かれている(種図11、12)。この胸の部分について、金剛峯寺本を中心とするその他の作例では異なる文様が配されている。

肩の部分の衣服の描写を見てみると、室生寺本と樂法寺本はやはりその形状が似る(種図13、14)。室生寺本と樂法寺本には、丸みを帯びた装飾が複数描かれるのに対し、他の

作例については、いずれもそのような装飾は一箇所にどめられている(種図

15、16、17、18)。長谷寺本のうち一点については、比較的室生寺本や樂法寺本に近い表現がみられた。善女竜王が手に持つ宝珠の周囲には炎が描かれるが、その形状については、炎の先端がひとつにまとまっているものと、複数に分かれているものの二種類確認でき、樂法寺本は複数に分けて描かれている。この特徴を有するのは、醍醐寺本の海波の描かれていた作例である。室生寺本については、画面状況が悪くはつきりと確認はできないが、雨引山のものも共通するように見える。

室生寺本では衣服の裾の朱で着色した部分に照限の技法が施されているが、樂法寺本では一色で塗りつぶされている点など、両者には相違点も認められる。しかし全体的には、両者の図様はよく似ており、裏書の記述とあわせ、樂法寺本は室生寺本を直接的な先例としている可能性が高い。また、長谷寺所蔵のうち一点は、雨引山ほどではないが、海波などに室生寺本との類似点が多く、室生寺本からの影響や樂法寺本との関係の強さを予測させる。

また、醍醐寺本は、先行研究において指摘されているように、海波の図様が室生寺本に影響したと考えられるほか、宝珠の図様については樂法寺本との共通点が見られた。これらのことをあわせると、醍醐寺本から室生寺本、そして樂法寺本や長谷寺本という図様の流れが自然と想起され、金剛峯寺本に端を発す善女竜王像の本流とは異なる系統の存在が予測される。

樂法寺には醍醐寺の末寺であった時期のあることが知られ<sup>9)</sup>、また長谷寺、室生寺、樂法寺は現在真言宗豊山派に属し、長谷寺と樂法寺は江戸期を通じて住職の移動など、密接な交流のあったことが明らかとなっている<sup>10)</sup>。室生寺はもともと興福寺の末寺であったが、江戸中期に豊山派になっており<sup>11)</sup>、これらの諸寺院が特に江戸中期以降宗教的に強いつながりを持っていた状況が看取される。善女竜王像における図様の継承は、これらの宗教的つながりの中で行われた可能性が高いと考えられる。

おわりに

(11) 前掲(7)参照

本稿では、雨引山樂法寺所藏善女竜王像について、真言密教系諸本、特に室生寺本との関わりを中心に考察を行ってきた。その中で、本図は、金剛峯寺本とはことなる、醍醐寺本、室生寺本を中心とする図様の系統に属することが窺えた。裏書の記述とあわせ、江戸後期に描かれ、室生寺より樂法寺へもたらされた可能性が高いものと思われる。図様のにも、海波に用いられる顔料を吹き付けたような技法などから、制作年代は江戸期でも降ることが予測される。本図は、善女竜王像の図様の変遷を考える上でも、江戸期における、寺院間の仏教図様伝播の状況を明らかにする上でも貴重な作例といえ、今後さらに研究を進めたい。

註

- (1) 『弘法大師空海全集 第八巻』(空海著、弘法大師空海全集編輯委員会編、筑摩書房、一九八五) 四四―四五頁参照。『大和古寺大観 第六巻 室生寺』(太田博太郎他編、岩波書店、一九七六) 五八頁に  
おいて、濱田隆氏は、善女竜王説話の成立は十世紀以降のことと推測している。
- (2) 『仏教美術事典』(中村元、久野健監修、東京書籍、二〇〇二) 五一―六頁参照。
- (3) 前傾註(2) 参照。
- (4) 『国宝・重要文化財大全 一 絵画(下巻)』(文化庁監修、毎日新聞社、一九九七) 一六六頁参照。
- (5) 『豊山長谷寺拾遺 第一輯 絵画』(元興寺文化財研究所編、総本山長谷寺文化財等保存調査委員会発行、一九九四) 八七頁参照。
- (6) 平成一七年度四月より筑波大学日本美術史研究室において行われている、雨引山樂法寺の文化財調査による。
- (7) 『日本名刹大事典』(圭室文雄編、雄山閣出版、一九九二) 八六七―八六八頁参照。
- (8) 展覧会目録『女人高野 室生寺のみ仏たち』(奈良国立博物館、一九九九) 一〇四頁参照。
- (9) 『大和村史余稿』(飯島光弘著、大和村役場発行、一九九六) 一五五―一六〇頁参照。
- (10) 前掲(9) 参照。



挿図1 雨引山桑法寺所藏善女竜王像



插图3 醍醐寺所藏善女竜王像



插图2 金剛峯寺所藏善女竜王像



挿図5 大通寺所蔵善女竜王像



挿図4 醍醐寺所蔵善女竜王像









插图10 室生寺本 部分

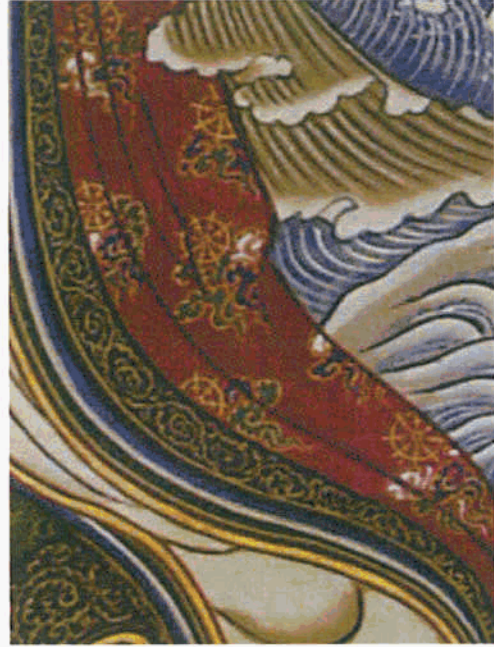


插图9 雨引山本 部分



插图12 室生寺本 部分



插图11 雨引山本 部分



插图14 室生寺本 部分



插图13 雨引山本 部分



插图 19 雨引山本 裏書



插图 15 金剛峯寺本 部分



图 16 大通寺本 部分



插图 17 醍醐寺本 部分



插图 18 醍醐寺本 部分

図 20 楽法寺本裏面

